昭和101年初夏、最後の汽車旅

北見医師会
オホーツク勤医協北見病院　武田雄太（たけだゆうた）

小生は札幌生まれの札幌育ち。旭川医科大学を卒業して早や四半世紀が過ぎた。北見市の現在の勤務先に異動して20年近くが経過した６月、緑陰随想への寄稿を依頼された。緑萌える季節に経験した直近の小旅行の経験を記載させていただく。

６月７日、久々に出かけた札幌からの帰りを一工夫。旭川までの道を富良野経由で移動した。その理由は後述。滝川で乗り換えたのは１両編成のワンマン気動車。よく見ると以前釧路にいた車両で昨年夏に稚内の診療所に短期間助勤に行った際に、現地で見かけた車両であった。いまどきエアコンはなく、代わりに天井に扇風機がついている。これから進むエリアは、昨今都市部に限らず地方でも普及してきたSUICAなどのICカードの使用はできず、支払いは現金か紙のきっぷのみの対応。内地から訪れた旅行者が見たら驚く仕様の車両だが、台所事情も厳しい折、老いたる車両も必要な職場に異動させて広範囲で活用しているのであろう。１年経過するのは早いなと感慨にふけりながら列車は滝川から空知川に沿ってさかのぼり、赤平や芦別といった旧炭鉱町を通過していく。炭鉱が閉山して久しく、街中に人影は見えず過疎化が進んでいる状況が見て取れた。緑萌える風景の中を進み、長いトンネルを抜けると富良野駅到着。ここから南へ伸び、狩勝峠を越えて十勝平野の西端新得までつながっていた80㎞の鉄路は２年前に廃止となり、富良野駅は行き止まりの終着駅となった。

ここで美瑛を経て旭川へ向かう富良野線に乗り換え。６月末から８月にかけて沿線の花畑は花盛りとなり国内外から観光客が押し寄せる一年で最も賑わいを見せる季節となる。このエリアへの旅行の利便を図る臨時列車が毎年設定され、札幌から富良野を目指す臨時特急と旭川から富良野を目指す臨時列車が運行される。今回のお目当ては後者で、その名も「富良野・美瑛ノロッコ号」、国鉄時代から使用されているディーゼル機関車が茶色の客車３両を牽引するスタイルだ。出入口とトイレ周辺部だけは約30年前の高校時代、自身が通学で乗ったことのある車両の原型をとどめていたが客室は大型のテーブルを伴う木製のベンチが設置され側面は大きな窓となっており、沿線の景色をゆっくり堪能できる造りとなっている。惜しまれるのは車両の老朽化に伴い、この夏の運行でお別れになることであろう。

16時14分富良野を出発。先頭の機関車が加速するとワンテンポ遅れて客車が動き出す。富良野盆地内の水田や玉葱畑の間をゆっくり進んでゆく。中富良野付近のラベンダー畑は開花までまだ時間がかかる様子であった。上富良野に近づくと右手に十勝岳が見えてくる。十勝岳はちょうど100年前の1926年５月に噴火。発生した火砕流が山の雪を溶かして泥流となり、麓の町を壊滅状態にした。今はその面影もなく平穏で多く観光客が登山や温泉に訪れている。上富良野を過ぎて美瑛の丘陵地帯を過ぎ、上川盆地に入ると旭川市南部の田園地帯を抜け、やがて住宅地の中を通り抜けて終点旭川に到着。旭川駅も15年前に高架化工事が完了。駅前にあった西武百貨店はなくなり、ターミナルホテルはイオンモールとJRインに変わり駅近くにタワーマンションが建ち、駅の裏手も忠別川をまたぐ橋が架かるなど自分が旭川医科大学に在学していたころとはすっかり様相が変化していた。昨年2025年は昭和100年の節目となる一年で自身も50歳の節目となり改めて年月の流れの速さを実感した旅であった。まだ肌寒い日だったので多くの窓は閉められていたが、約１時間半の道中で田園風景を存分に堪能できた。

風光明媚な夏の北海道の情景を堪能できるこの観光列車は富良野・美瑛エリアの他、釧路湿原エリアでも運行されている。こちらも同時期の建造なので今季限りで引退となる。遠い昔体験した「汽車旅」の経験ができるのもあと３カ月余り。本稿が掲載されるのは夏休み真っ最中の頃と思われる。この夏休みはゆっくりと鉄道旅を体験してみてはいかがだろうか。なお、どちらのエリアも全列車・全車両指定席（大人1,000円）なのでお席の確保はお早めに。

大きな窓に映る美瑛の田園風景